様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年４月２０日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2012
課題番号：20520212
研究課題名（和文）〈９・１１〉以降における現代アメリカ演劇の比較演劇学的研究

研究課題名（英文）Comparative Study of Contemporary American Theatre After 9.11.
研究代表者
内野　儀（UCHINO TADASHI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：40168711

研究分野：アメリカ演劇・表象文化論
科研費の分科・細目：文学・英語・英語圏文学
キーワード：現代アメリカ演劇、比較演劇、９・１１

１．研究計画の概要
本研究の目的は、アメリカ合衆国において、いわゆる「〈９・１１〉以降」と呼ばれる状況のなか、そのような社会経済政治構造の変化を重要な文脈と見なしつつ、現代アメリカ演劇がどのような展開を見せているのかを実践的・理論的水準で把捉することにある。本研究では、これまでの研究成果をふまえ、「〈９・１１〉以降」という同時代のキーワードを導入することにより、各国文学研究の下位に位置づけられてきた研究分野としての「演劇」ではなく、大きく変容を遂げつつある世界＝グローバルを理論化・問題化しつつ、文化・芸術実践の重要な場所（サイト）として、アメリカ合衆国＝ローカルにおける２００１年以降のアメリカの現代演劇実践を比較演劇学的に捉えようとするものである。

２．研究の進捗状況
「〈９・１１〉以降の現代アメリカ演劇の実態の把握」という観点から、ニューヨークとロスアンジェルスという東海岸と西海岸の演劇の拠点都市と、アメリカ合衆国各地に存在するリージョナル・シアターにおける演劇実践を具体的な研究対象とし、該当する演劇についての基本図書、すなわち現代アメリカ演劇関係の研究書や演劇を扱ったさまざまな雑資料（新聞、大衆雑誌を含めた諸雑誌）の収集を行ってきた。また、本研究のもう一つの重要なテーマである「〈９・１１〉以降」をめぐる欧米ならびに日本における思想状況を把握するため、多様な学問領域における基本図書を収集・通読した。その際、批評理論にかかわる諸文献――ポスト構造主義、フェミニズム、ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ等々――と、テロリズムやグローバリゼーションをめぐる思想・哲学系の書物が資料収集の中心となった。さらに、演劇の場合、活字メディアだけを見ても、そこから得られるものは限られることが想定されるので、活字メディア以外の演劇実践に関係する映像資料も可能なかぎり収集することになった。その研究成果は既に、いくつかの学会発表や論文執筆によって、公表している。また、内外の研究者との研究交流を通し、本研究についてのさまざまな示唆を受ける機会も多くあった。さらに、アメリカ国内よりも主としてヨーロッパを活動の場としているアメリカ国籍者からなる演劇集団の存在感が増していることを知ったことも、大きな成果であった。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
大学の雑務等で時間を取られることが多いが、本研究については、資料収集は順調に進んでいる。ただし、研究代表者の研究の性質上、研究テーマの延長線上で、日本の現代演劇や演劇状況について招聘公演を行ったり、論文執筆をすることも多くなってきている。
４．今後の研究の推進方策
このまま資料収集をつづけていくことが基本であるが、この研究を開始してから知るようになったさまざまな新しいアメリカ現代演劇の動きをより執拗に把捉することが今後の課題になると考えている。
５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①内野　儀　「村上春樹を上演（perform=embody）するために――〈いま、ここ〉のマテリアリティの複雑化ということ」、査読無、「ユリイカ」1月臨時増刊号、pp. 183-191。

②内野　儀　「10年代の上演系芸術――ヨーロッパの「田舎」をやめることについて」、査読無、「ユリイカ」9月号（42巻10号）、2010、131-139。

③内野　儀　「科学／ガリレイ／革命――ブレヒト『ガリレイの生涯』をめぐって」、査読無、「現代思想」9月号（37巻12号）、2009、pp. 177-191。

④内野　儀　「パフォーマンス研究の現在――パフォーマティヴィティ・身体・認知」、査読無、「ヒューマン・コミュニケーション研究」第37号、2009、pp. 5～24。

⑤内野　儀「ベルリンからブリュッセルへ、あるいはポストポリティカルな演劇の風景からアーティストの流動性（モビリティ）へ」、査読無、「舞台芸術」第14号、2008、pp. 193-203。

⑥内野　儀「グローバリゼーションは身体に悪い」、あるいはトランスナショナルな場（オープン・スペース）で共振するポストヒューマンな身体について」、査読無、「劇場文化」第12号、2008、pp. 82-92。

〔学会発表〕（計４件）

①Uchino, Tadashi ”What about Machines?: Performing “J-type Technology” in Japan’s Contemporary Performance Culture, 2010.10.16, Association for Japanese Literary Studies, the 19th Annual Meeting における基調講演、Yale University.

②内野　儀　「グローバルな交渉は起きているし、起きていない――チェルフィッチュによる現在進行形のアトランダムな接合をとりあえず記述=肯定すること」、第５回表象文化論学会シンポジウム「現代日本文化のグローバルな交渉」、2010.7.3.、青山学院大学。

③Uchino, Tadashi, “Misperforming and the Everyday: Oshima Nagisa’s *Shinjuku Dorobo Nikki* (1968),” Performance Studies International #15, 2009.6.24-27, University of Zagreb, Zagreb, Croatia.

④内野　儀　「パフォーマンス研究の現在――パフォーマティヴィティ・身体・認知」、日本コミュニケーション学会第38回年次大会、基調講演、2008.7.5.、名古屋外国語大学。

〔図書〕（計１件）

①Uchino, Tadashi Calcutta: Seagull Books, “Crucible Bodies - Post-War Japanese Performance From Brecht to the Millennium,” 2009, 212p.